

国立大学附属幼稚園からの提案 8

言葉を豊かにはぐくむ経験や援助の在り方



平成25年 3月

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

発刊にあたって

リーフレット第8号をお届けいたします。

本号のテーマは、「言葉を豊かにはぐくむ経験や援助の在り方」です。人間にとっての言語活動は、周囲の人々との意思疎通を図る上での重要な要素であることはもちろんですが、それ以上に、思考を司る具であることに注意すべきでしょう。人は、言葉を介してものを考えています。したがって、幼児の「言葉を豊かにはぐくむ」ことは、彼らの「思考力を豊かにはぐくむ」基層を形成することにほかなりません。

本テーマの下、研究の成果をご紹介くださった6園の皆様、またご多忙の中、貴重なご教示を賜りました筑波大学監事内田伸子先生には、心より感謝申し上げます。

このリーフレットが、各園の保育や研究の一助となることや、公開研究会等を通して配布いただくなどして、地域の幼児教育関係者に活用されますことを願ってやみません。

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

部会長 藤 本 宗 利

目 次

発刊にあたって	1
豊かな体験が豊かな言葉をはぐくむ 「伝えたい」「知りたい」思いに寄り添い、支える援助の在り方	2
茨城大学教育学部附属幼稚園	3
心豊かな幼児の育成～言葉で考え、表現する力に視点を当てて～	4
愛知教育大学附属幼稚園	4
「響き合うコミュニケーション」の力をはぐくむ教育課程の在り方	5
京都教育大学附属幼稚園	5
子どもが豊かに感じ、考え、表すための心の声を聴く保育をめざして	6
岡山大学教育学部附属幼稚園	6
かかわる力をはぐくむ～言葉の育ちに着目して～	7
鹿児島大学教育学部附属幼稚園	7
コラム 子どもの言葉やところを伸ばす援助	8
筑波大学監事・お茶の水女子大学名誉教授 内田 伸子	8
平成25年度 全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧	9

豊かな体験が豊かな言葉をはぐくむ

上越教育大学附属幼稚園

幼児は、ものやことへの気付きを自分の言葉で他者に伝えようとしたり、友達とやりとりをしたりして、言語感覚を豊かにしていきます。私たちは、幼児に豊かな直接体験を提供できるような環境づくりに努めています。また、幼児の発する言葉やその子らしい表現を共感的に受け止めるようにしたり、幼児の気付きを広げる対話を心がけたりしています。遊びの中で経験を伴って培った語彙や表現力は、言語リテラシーの基盤となります。それらはやがて文字を覚えたり、読んだり使ったりすることにもつながります。以下に、幼児の豊かな言葉が生まれた事例の一部を紹介します。

園での遊びと家庭生活がつながる（3歳クラス）

ママごとをしていたA児は、友達が「カレーができたよ」と言うのを聞いて、「6時だよ。ご飯を食べる時間だよ」と友達に伝える。遊びと生活経験を結びつけて言葉を発する。



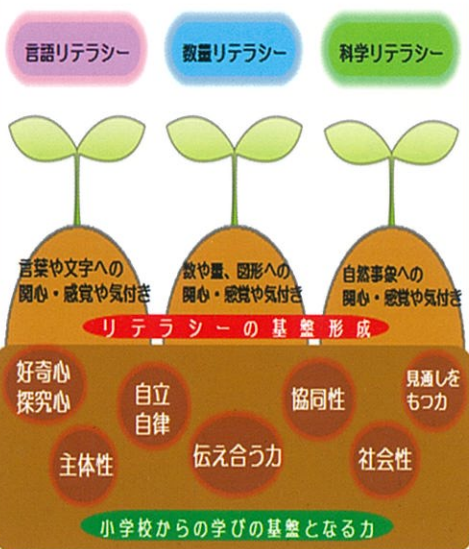
したこと順に伝える（3歳クラス）

教師が「どうやってつくったの」とB児に尋ねると、「砂を入れて…、混ぜ混ぜして…、お花をパラパラしたの」と、体験順に言葉で再構成し話そうとする。



実感を伴って言葉を獲得する（4歳クラス）

園庭のグミを食べたC児は、教師から「ちょっと渋かったかな」と声をかけられて、渋いという言葉を実感を伴って獲得する。「渋いけどおいしいから食べて」と言いながらグミを配る。



自分らしい表現を楽しむ（4歳クラス）

落ち葉を踏みしめながら森を散歩するD児は、足の裏に伝わる感触を「シンシンするね」と教師に伝える。教師は、その子らしい表現（擬態語）を共感的に受け止める。



量感などを言葉に表す（5歳クラス）

かまくらづくりをしていた幼児たちは、「隣のかまくらは7人も入れるのに、ぼくらののは、6人しか入れないよ。それも座らないとだめだよ。もっと掘らなきゃ。」とかまくらの大きさを自分たちの身体を任意単位にして比較する。



表現にこだわる（5歳クラス）

ペープサート劇のシナリオをつくっていた幼児らは、「トトトトは走っているみたいだよ、トコトコの方の方が歩いてる感じが出るよ」と、人形の動きに合わせた台詞を考えようとする。

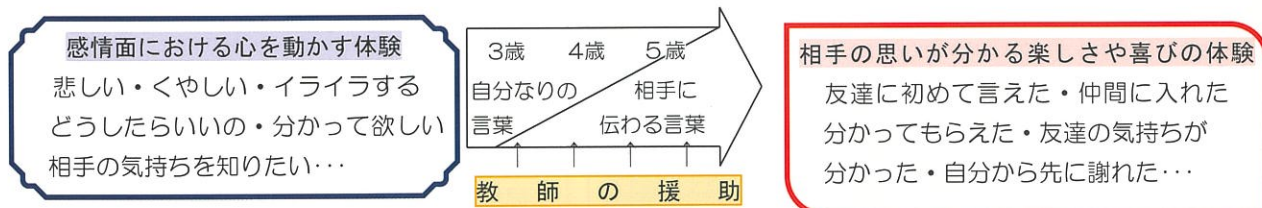


* 中央の図は、本園が幼小の円滑な接続を促すために、3年間の保育を通じて育てたい力等を図示したものです。言語リテラシーの基盤もこの時期にはぐくむものとして大事にしています。

「伝えたい」「知りたい」思いに寄り添い、 支える援助の在り方

茨城大学教育学部附属幼稚園

幼児は、友達と生活を共にする中で次第に友達に関心をもつようになり、「一緒に〇〇したい」と願うようになる。しかし、その伝達方法は自分本位で、心ならずもトラブルになってしまうことがある。教師がすべてのトラブルの仲介にかかわることは不可能であり、幼児自身が自分たちの関係の中で調整していきけるようになることが重要なことと捉えている。そこで、自分の思いが通じない場面で起こる心を動かす体験をチャンスと捉え、言葉を介して自分の思いが伝わったり、相手の思いが分かったりする楽しさや喜びの体験ができるような援助について探ることにした。



◇援助の事例

「やだ!」「できない!」 - 3歳男児 -

7月になっても「できない…」と泣き騒ぐA男。教師は「こうすればいいよ」と行動を促すことばかりを伝え、本人のイライラの原因となっていたのかもしれない。そこで泣くことや怒ることが自己表現の一つと捉え、言葉にならない思いに寄り添うことにした。言葉がけや手出しなどの直接的な援助を控え、気になってもあまり見ないようにし、間接的な援助を積み重ねた。10月のある日、「お弁当箱、片付けようか。カバン開けておくとよ」ときっかけとなる言葉をかけたところ、
「うん、わかった。ありがとう」という言葉が返ってきた。

友達と一緒にお弁当を食べないB男 - 4歳男児 -

一人っ子で大人とのかかわりの方が多かったB男。友達存在を怖がり、3歳児の時は自分の気持ちを教師に代弁してもらうことが多かった。9月になり友達との遊びに興味を示し始めたが、「入れて」と言えず、「一緒に言って」と頼るばかり。そこで、遊びに使う懐中電灯を1つだけ用意した。他教師にB男に言われても別な物を出さないように頼んだ。自分の言葉で友達に貸して欲しいという思いを勇気を出して伝えられるよう、断られてもあきらめないよう何度も後押しした。
やがて、
「ねえ、貸してよ。もういい?」
と自分の言葉で友達に伝える姿があった。

「勝手にやらないで!」 - 5歳女児 -

C子は友達に対して一方的に自分の思いを通して仲間との遊びが気まずくなることが多い。トラブルになったときには子どもの間に入り、双方の思いをじっくり聞いたり、自分たちで解決できるように問いかけたりと解決策が子どもから出てくるのを待つようにした。また、C子の気持ちに寄り添い、責めるのではなく「知りたいから教えて欲しい」と教師の思いを伝えたり、トラブル相手の思いを先に伝えたりしてきた。しだいに自分が勘違いしたこと気付くようになり、
初めて自分から謝ることができた。

◇子どもの思いに寄り添い、思いを伝える姿を支える教師の援助

・子どものペースを理解する。
・言葉にならない気持ちを受け止める。
〈幼児理解〉

・気持ちを表す言葉を知らせる。
・常に見守り、思いが通じなかった時に支える。
・子どもの思いを伝える仲立ちをする。
・自分から伝えなくなる時を待つ。
・双方の気持ちを代弁する。 〈直接介入〉

・その子の得意なことや周囲に認められる場をつくる。
〈環境構成〉

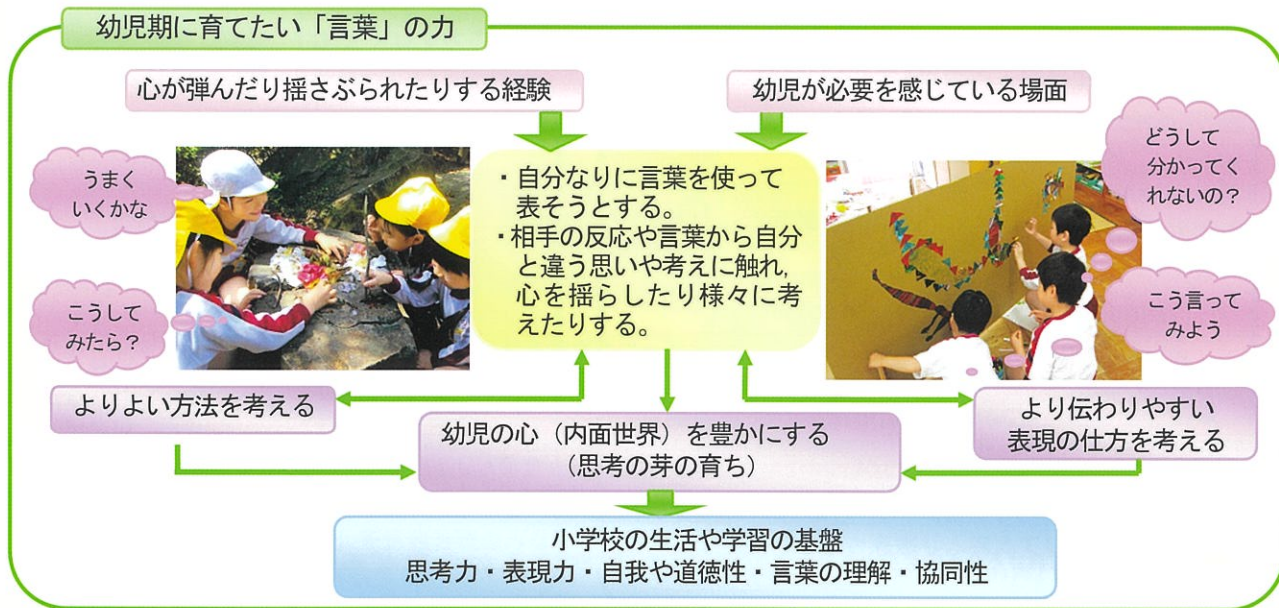


心豊かな幼児の育成

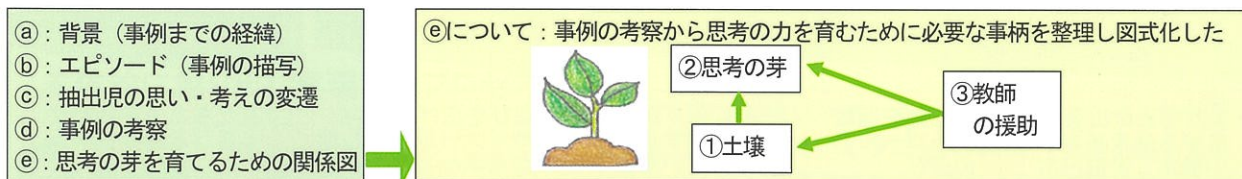
～言葉で考え、表現する力に視点を当てて～

愛知教育大学附属幼稚園

幼児が「遊び」のなかで体験したことや思い・考えを言葉で表現することは、幼児の内面世界を豊かにし、学びを確かにすることにつながっていく。そこで、本研究では、幼児の言葉にならない感情や欲求がどのようにして「思い」となるのか、また、その「思い」が教師や友達など周りの人へのかかわりを求めて表出される「言葉」となるのか、言葉で考え、表現する過程を、事例検討を通して幼児の表情や行動、言葉などから読み取っていった。そして、「思い」や「考え」が深められることで引き出される「思考の芽」となる姿を明らかにし、そのために必要な教師の援助を考えていくことにした。



◇ 事例から幼児の「思い」が「言葉」となる過程を読み取り、「思考の芽」の育ちを探る



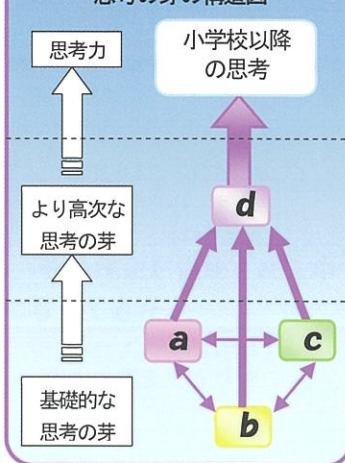
◇ 研究を通して分かったこと

◇ 必要な経験を支える教師の援助

「思考の芽」の育ちの分類

- a** 自分の感情・思いの強まりに伴って
自分の思いと向き合ったり思いを確かにした
りする過程で育まれる「思考の芽」
- b** 人とかかわりの深まりに伴って
伝え合いや折り合いを付けるなど、他者との関
係が深まる過程で育まれる「思考の芽」
- c** 言葉で表す力の高まりに伴って
自分の思いや考えを相手に伝えるように表現
しようとする過程で育まれる「思考の芽」
- d** 思考の広がりや深まりに伴って
先を見通し、結果を予測するなど、場や状況に
応じようとする過程で育まれる、より複雑で高次
な「思考の芽」

思考の芽の構造図



幼児を理解して援助する

幼児のなかに育ちつつあること、興
味や関心、実現したいこと、つまずき
などを把握し、指導計画に取り入れ
たり、臨機応変な援助をしたりする

「土壌」の育ちを支える

周りの人との信頼や愛着の関係を
つくったり、自らしてみようとする意
欲と態度を育んだりする

「思考の芽」を小学校以降の 生活につなげる

幼児期から児童期への発達と教育
に見通しをもち、幼児期にふさわしい
教育を展開し「芽」を育てていく

愛知教育大学附属幼稚園 〒461-0047 名古屋市東区大幸南 1-126
電話：052-722-4610 FAX：052-722-3743
Eメール：www-k-kinder@aeu.ac.jp

「響き合うコミュニケーション」の力を はぐくむ教育課程の在り方

京都教育大学附属幼稚園

本園では「対人関係をつなぐ言葉『じゃあ』」を使い（平成21年度）「いや・だめ（あかん）」に対して（平成22年度）、どのように相手との思いを調整していくのか、子どもの論理を分析してきた。コミュニケーションによる対人関係の調整の根底には、遊びをおもしろくしたい、楽しみたい、友だちと一緒に遊びたい、という一人ひとりの心情・意欲・態度がある。それこそが言葉をはぐくんでいくと考える。対立場面を原因・介入・方略で分析し、3歳児では対立状況の原因に、4歳児では介入に、5歳児では方略に変化の特徴が見られた。交渉過程の特性をもとに、教育課程に新たに「交渉（コミュニケーション）」を位置づけた。そこから見えてきた「響き合うコミュニケーションの力をはぐくむ」環境構成、援助等の工夫改善について検討した。



3歳児の対立状況の原因の変化からみられる発達の特徴『自己主張』

Ⅰ期(4-5月)	Ⅱ期(6-7月)	Ⅲ期(9-10月)	Ⅳ期(11-12月)	Ⅴ期(1-3月)
<ul style="list-style-type: none"> 物の取り合い(後半) 教師の取り合い 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちと1対1の関係に関するもの 教師とする生き物の世話など手伝いや片付け 	<ul style="list-style-type: none"> 「～しかだめ」「～だけ」仲間入り 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びのイメージのずれ 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの役割
環境 <ul style="list-style-type: none"> 自由性、可塑性のある砂場での遊び 	<ul style="list-style-type: none"> おいかけっこなど教師と触れ合う遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 段ボールの家やままごとハウスなど友だちと場を共有できる環境 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちで遊びの場を作ったり、イメージが持てたりする遊具 	<ul style="list-style-type: none"> 簡単なルールや約束を決めたり守ったりしながら遊べる遊び
援助 <ul style="list-style-type: none"> 受容を重視し、安心できる関係をつくる 		<ul style="list-style-type: none"> 解決を急がず、3歳児なりに交渉し始める姿を見守り、理由を問う「なんでかな」や提案する「じゃあ」の言葉などをかける 		

4歳児の対立状況における介入の変化からみられる発達の特徴『教師介入から子どもの第三者介入への変化』

Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期
<ul style="list-style-type: none"> 子どもも第三者として介入し解決策を提案するが終結は自然消滅 			<ul style="list-style-type: none"> 子どもからの「ジャンケン」「握手」の提案 	<ul style="list-style-type: none"> 教師介入の下、他者視点で当事者双方が納得いく解決策を模索
環境 <ul style="list-style-type: none"> 友だちとの出会いを広げるままごとや中積木、遊動円木 	<ul style="list-style-type: none"> 心や体を開放するプールでの遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 数に限りがあり交渉せざるを得ない遊具 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びを広げ、思いやイメージを表しながら集って遊べる場 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちと力を合わせる喜びを感じられるごっこ遊び
援助 <ul style="list-style-type: none"> 信頼関係をつくる 		<ul style="list-style-type: none"> 「じゃあ」の言葉を使い次の解決を共に考える 互いの主張を調整し整理する 「こうかな、ああかな」と互いの気持ちに気づけるような言葉をかける 		

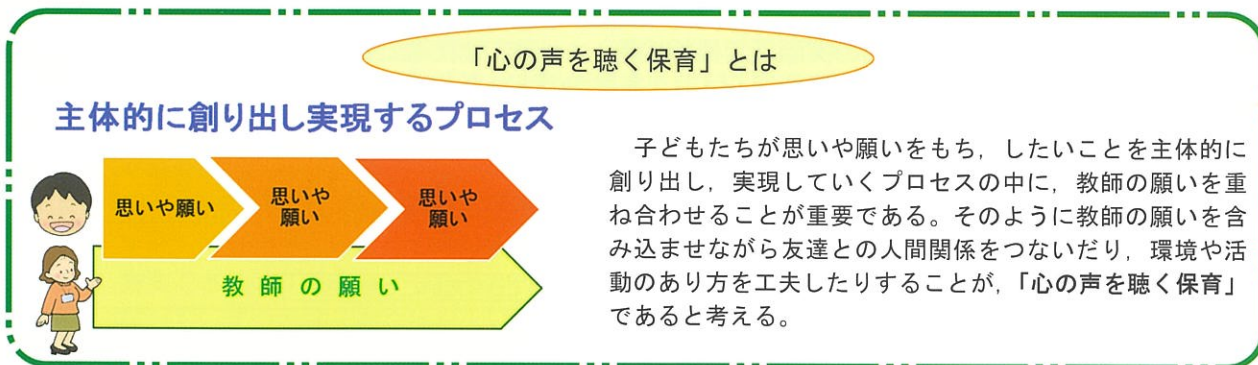
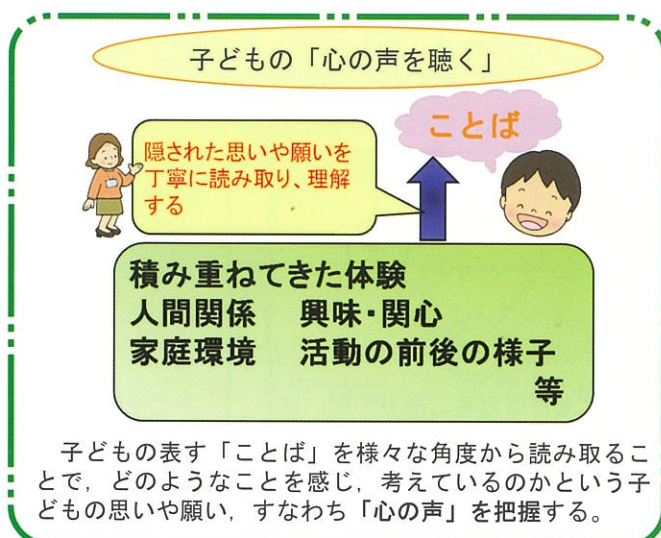
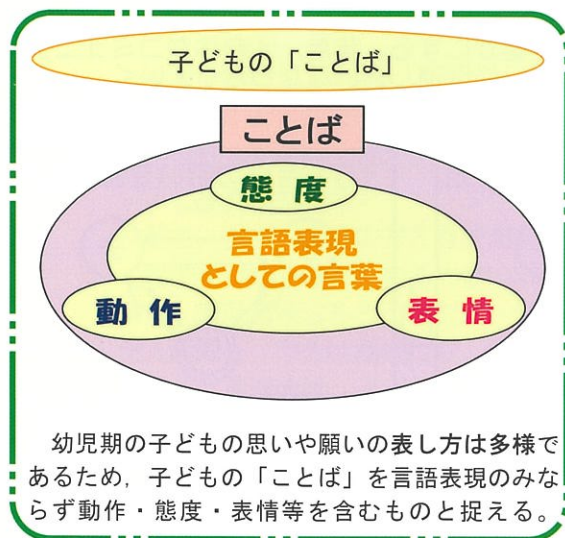
5歳児の対立状況の方略の変化からみられる発達の特徴『多様な仲間関係での交渉の重なり』

Ⅰ期 Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期 Ⅴ期
<ul style="list-style-type: none"> 意図の質問「なんで」 代案提示(どちらか選ぶ案、ジャンケン) 条件付き(数や時間限定、自分にとって良い条件) 意思主張(好きな友だちに) 	<ul style="list-style-type: none"> 代案提示(公平を求める案) 意思主張(生活グループの友だちに) 	<ul style="list-style-type: none"> 代案提示(相手を思いやった案、見通しをもった案、考えを広げていく案、友だちのことも考えた案)
環境 <ul style="list-style-type: none"> 5歳児だけでじっくりと遊ぶことができる場 生き物の世話 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き思う存分にやりとりを重ねて遊ぶことができる遊具 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き仲間と共に目的をもった取り組み 学年での協同(協働)的な取り組み
援助 <ul style="list-style-type: none"> 言葉で理由を伝えるとともに、相手にわかる(他者視点に立つ)言葉かけを促す やりとりを重ねながら互いに納得しようとする姿を見守る 		

子どもが豊かに感じ、考え、 表すための心の声を聴く保育をめざして

岡山大学教育学部附属幼稚園

幼児期の「ことば」を豊かにほぐくむためには「ことば」で伝えたいという意欲に支えられながら、動作・態度・表情等を含む多様な方法で、思いを伝えようとする心情や資質をはぐくむことが重要であると考えます。その心情や資質をはぐくむためには、日々子どもが感じたり考えたりしている思いや願いに沿った適切な援助を、教師の側が行う必要がある。そこで本研究では、子どもが表す「ことば」の背景にある思いや願いを様々な角度から読み取り、子どもの思いや願いと教師の願いを重ね合わせながら援助を行うことを「心の声を聴く保育」と称して取り組むことで、子どもの感じ方や考え、「ことば」による表現を豊かにしていきたいと考える。



成果と課題

「心の声を聴く保育」の成果

- 言語表現に限らない、多様な自己表現を引き出すことで、自己表現する楽しさや大切さを経験し、次第に言語表現も豊かになった。
- 自分の思いや願いが教師に受け止められ、その実現が援助される中で、自己肯定感や自己効力感が形成され自信をもって自己表現できるようになってきた。

今後の課題

- 発達に応じて複雑化する「心の声」に対応するために、子どもの発達に応じた聴き方を明らかにする。
- 「心の声を聴く保育」を通した子どもの学びや育ちを多面的に評価する方法や、教師の保育力を高める方法をさらに吟味する。

岡山大学教育学部附属幼稚園 〒703-8281 岡山県岡山市中区東山2-9-20
 電話：086-272-0260 FAX：086-273-9229 Eメール：youchien@fuzoku.okayama-u.ac.jp

かかわる力をはぐくむ ～言葉の育ちに着目して～

鹿児島大学教育学部附属幼稚園

幼児のコミュニケーション能力は人、もの、自然などの環境とのかかわりの中ではぐくまれていくと同時に、「かかわる力」をはぐくむためには「言葉の育ち」に配慮した保育者の援助の在り方、環境構成の工夫・改善が必要であると考えます。わたしたちは、言葉を4つの側面（①話すこと、②聞くこと、③伝え合うこと、④親しむこと）に分けて「かかわる力」との関連を研究してきました。

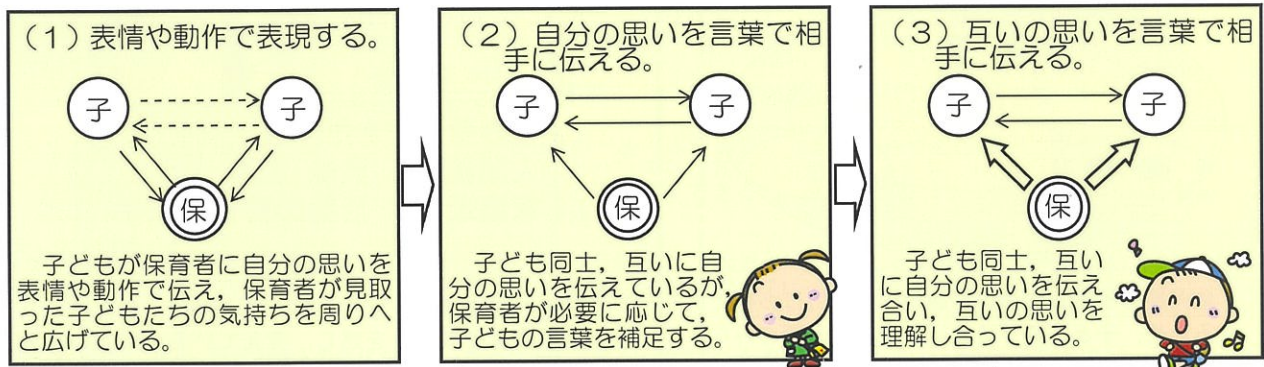
様々な環境との直接体験などで得た驚きやおもしろさ等を友だちに「話すこと」、友だちが感じた驚きやおもしろさ等を「聞くこと」により感動はさらに広がります。その驚きやおもしろさ等について思いや考えを交えて「伝え合うこと」により感動はさらに深まり、コミュニケーション能力が培われ、さらには「かかわる力」がはぐくまれます。また、生活の中で絵本や物語、わらべうた、手遊び等に数多く「親しむこと」で言葉の美しさや響きの面白さに気付き、表現しようという意欲がわいてくるのです。

1 言葉における4つの側面

○4つの側面……①話すこと ②聞くこと ③伝え合うこと ④親しむこと

○①と②は繰り返しながら③へと発展し、④はこの過程を豊かにする。また、④自体がコミュニケーションを促す楽しさや感動をもたらす。これらは、お互いに関連し合いながら育っていく。

2 「言葉の育ち」と保育者の役割



⊙子ども ⊙保育者 → 感じたことを言葉に出す → 様子を見ている → 見守っている
「言葉の育ち」を促すための保護者の支援の在り方を段階を追ってまとめたものです。

3 「目指す言葉の育ち」と育ちの実際（年長組の例）

※「親しむこと」については省略

4つの側面それぞれについて学年毎に「目指す言葉の育ち」を設定し、実際の育ちを分析しました。

側面	目指す言葉の育ち	I 期 (4-5月)	II 期 (6-7月)	III 期 (9-10月)	IV 期 (11-12月)	V 期 (1-3月)
話すこと	○身近な環境に興味をもち、思ったこと、感じたことを豊かに表現する ○自分なりに場面に応じた言葉で思いを伝える	友だちや先生に自分のしたいことや困ったことを自分の言葉で話す 友だちや先生に諸感覚を駆使して味わった感動を話す				
聞くこと	○興味をもって話を聞いたり、考えたりする	興味をもって先生や友だちの話を聞く 興味をもって友だちや先生の話聞き、自分の感動と比べる 友だちや先生の話聞き、自分の気持ちを調整する				
伝え合うこと	○伝え合う喜びを味わう	考えを相手に理解してもらったり、受け入れてもらったりする 自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを知ったりすることで気持ちに折り合いを付けようとする 自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを聞いたりすることで、遊びを深める 必要に応じて自分の意見が相手に伝わっているか確かめる				

4 研究の成果

○保育者が個に応じた適切な支援や環境設定の工夫・改善を行うことによって、「言葉の育ち」が促され、コミュニケーション能力が向上し、かかわる力が育ってきた。

○「親しむこと」を意図的計画的に実践することによって、言葉のおもしろさ、表現の不思議さ等に気付いて「言葉の育ち」がより豊かになるとともに、表現しようとする意欲がはぐくまれてきた。

鹿児島大学教育学部附属幼稚園 〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1-20-15
電話：099-285-7990 FAX：099-285-7995 Eメール：youchi@edu.kagoshima-u.ac.jp



コラム

子どもの言葉やこころを伸ばす援助

筑波大学監事・お茶の水女子大学名誉教授

内田 伸子

保育室では子どもが主人公である。あらゆる遊びは子どもの自発性を出発点とする。保育は子どもの生活から出発し、子どもの生活を充実させることに終わる。保育者は子どもの言葉やこころを伸ばすために、子どもの自発的活動にわきから寄り添い援助する。何よりも子どもがつまづいているとき解決法をトップダウンに与えてしまう「教導」ではなく、子どものこころの声をよく聴き、子ども自身の考える余地を残す援助を与えたいものである。

幼児期は個人差が極めて大きい。暦年齢で1年の開きのある子ども達が同じ保育室で生活する。身体、運動機能はもちろんだが、知的にも社会的にも1年の開きはかなりの差をもたらす。同一個人内でも、手先は器用だが、全身の筋肉を使うような遊びは苦手というような「個人内の差」もある。保育者は、子ども一人ひとりの発達水準をみきわめ、発芽しかかっている領域「発達の最近接領域」に働きかけると子どもは伸びる。発達の最近接領域とは、すでに「完成した発達水準」と、大人の援助や教育的働きかけにより伸ばすことができる「可能的水準」の間を指している。

暦年齢が5歳半の2人の子どもに知能テストを実施したところ、二人とも6歳レベルの課題を自力で解けた。二人とも、精神年齢は6歳と診断された。ここで知能テストの方法を少し変え、子どもにヒントや援助、誘導的な質問を与えてみた。すると、Aは9歳レベルの課題まで解けたが、Bは7歳半レベルの課題まで解けた。精神年齢は同じ6歳であっても大人の援助によって、二人の解ける課題の水準には1歳半の開きが出た。2人の子どもは自主的活動という点では同じ水準にあるが、発達しつつある範囲は違っており、大人の教育的働きかけの効果も違ってくるのである。

では、どうすれば、発達の最近接領域に働きかけることができるのか。保育者は多くの子どもを見て、どの子どもにどの程度の具体性をもったことばかけや働きかけをしたらよいか経験から推測できるはずである。もちろん、経験を過信するのはまずい。ヒントの与え過ぎや教え込みになってしまう危険を避けられない。だから、最初は具体的ではなく、できる限り、少な目にヒントを与えるのである。ときにはヒントを出しても子どもが受け入れられないときには、それ以上、大人の考えを押し付けないようにすることが肝心である。あくまでも子ども自身が解決策を見いだせるよう考える余地を残すことが肝心である。教導は慎重に、他に働きかけができないときにとる最後の手段である。子どもの言葉やこころを伸ばすためには、まず、保育者は「待つこと」、そして、子どものこころの声を「聴くこと」が肝心である。保育者は、待つ、みきわめる、急がない、急がせないで、子どもの歩みをわきからそっと支えていただきたい。



平成25年度 全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧

	幼稚園名	研究テーマ	公開研究会期日
1	北海道教育大学 附属旭川幼稚園	幼児が主体の幼稚園 ～幼児の生活に沿った教育課程の在り方～	25.10.5(土)
2	北海道教育大学 附属函館幼稚園	幼児の育ちとことば	25.10.19(土)
3	弘前大学教育学部 附属幼稚園	協同的な学びを考える ～遊びが生まれる環境の工夫～	25.9.14(土)
4	岩手大学教育学部 附属幼稚園	学びの基礎を培う遊びの充実を目指して ～保育環境の意味を問い直す～	25.6.29(土)
5	宮城教育大学 附属幼稚園	かかわる力を育てる ～遊びの充実を図るための環境構成について(2年次)～	25.6.6(木)
6	秋田大学教育文化学部 附属幼稚園	遊びの充実を目指して	25.10.17(木)
7	山形大学 附属幼稚園	心つながる子ども ～心つながるための援助を探る～	25.5.31(金)
8	福島大学 附属幼稚園	保育を見つめ直す ～新しいカリキュラムをめざして～(2年次)	25.5.24(金) 25(土) 25.7.31(水)
9	茨城大学教育学部 附属幼稚園	子どもと共に遊びをつくる	25.11.12(火) 26.1.30(木)
10	宇都宮大学教育学部 附属幼稚園	子どもの豊かな暮らしを創造する幼稚園の環境	25.10.29(火)
11	群馬大学教育学部 附属幼稚園	友達とかかわる力をはぐくむ保育	25.6.8(土) 25.10.26(土)
12	埼玉大学教育学部 附属幼稚園	質の高い保育とは何かを問い直す ～教職員相互の保育「観」と「勘」の共有をとおして～	26.1.22(水)
13	千葉大学教育学部 附属幼稚園	心が動く子どもの育成をめざす教育課程 ～「かながえる」子どもの育成をめざして～	25.10.19(土)
14	東京学芸大学 附属幼稚園竹早園舎	主体性をはぐくむ幼小中連携研究	26.1.
	東京学芸大学 附属幼稚園小金井園舎	今日から明日へつながる保育 ～保育記録を活用する～	25.12.7(土)
15	お茶の水女子大学 附属幼稚園	探究力・活用力が発揮される生活	25.6.28(金) 26.2.7(金)
16	山梨大学教育人間科学部 附属幼稚園	子どもが自らかかわり創り出す園生活	25.6.22(土)
17	新潟大学教育学部 附属幼稚園	社会的な知性を培う(幼小中一貫教育カリキュラムの開発)	25.5.29(水)
18	富山大学人間発達科学部 附属幼稚園	豊かな心をはぐくむ ～より確かな援助を求めて～	未定
19	金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属幼稚園	幼稚園における遊びを探る ～遊び込む姿をめざして～	25.6.15(土) 25.11.23(土)
20	福井大学教育地域科学部 附属幼稚園	伝え合う ひびき合う ～遊びの中の学びをつなぐ～	25.10.19(土)
21	信州大学教育学部 附属幼稚園	幼小合同研究テーマ「学び続ける子ども」(最終年次) 幼稚園研究テーマ「その子どもの感じている、『遊びの魅力』をみつめて」	25.11.9(土)
22	上越教育大学 附属幼稚園	遊び込む子ども ～学びの基盤に着目して～	25.10.9(水)
23	静岡大学教育学部 附属幼稚園	「子どもが遊びこむための指導計画の作成」	25.11.13(水)
24	愛知教育大学 附属幼稚園	「学びと育ちの連続性」を見通した幼児期の教育を考える	25.11.14(木)

	幼稚園名	研究テーマ	公開研究会期日
25	三重大学教育学部 附属幼稚園	夢中になって遊ぶ姿を支える教師の援助	26. 2. 1 (土)
26	滋賀大学教育学部 附属幼稚園	「わくわくの創造」 —自らのりだし、人とゆきかう子どもを育てる—	25. 11. 20 (水)
27	京都教育大学 附属幼稚園	生き物と共に育つ保育のあり方	25. 11. 1 (金)
28	大阪教育大学 附属幼稚園	きく力を育てる ～人の思いを感じられる子どもをめざして～	25. 11. 9 (土)
29	兵庫教育大学 附属幼稚園	子どもの育ちにとって意味ある環境とは	25. 5. 29 (水) 25. 8. 1 (木) 26. 1. 25 (土)
30	神戸大学 附属幼稚園	子どもにとっての遊びの意味を問い直す ～幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム「神戸大学附属幼稚園プラン」にふれて～	25. 8. 6 (火)
31	奈良教育大学 附属幼稚園	幼児期に必要なからだ力について考える	25. 6. 8 (土)
32	奈良女子大学 附属幼稚園	幼児期から青年期にかけての縦断的研究	26. 2.
33	鳥取大学 附属幼稚園	学びをつなぐカリキュラムの創造Ⅱ	25. 10. 25 (金)
34	島根大学教育学部 附属幼稚園	〈幼小中一貫教育研究テーマ〉豊かな「学び」をつくる子どもの育成 —学びを拓く子どもの姿を求めて—	25. 6. 21 (金)
35	岡山大学教育学部 附属幼稚園	考える力を育てることばの教育 —「ことばの力」を豊かにはぐくむ援助のあり方を探るⅡ—	25. 11. 7 (木)
36	広島大学 附属幼稚園	森で育つ：森の幼稚園の保育プラン（4年次） ～幼児の体験内容からカリキュラムを見直す～	25. 11. 13 (水)
37	広島大学 附属三原幼稚園	社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、 幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発（2年次）	25. 11. 15 (金) 25. 11. 16 (土)
38	山口大学教育学部 附属幼稚園	保育力の向上を目指して（2年次） ～自覚的保育の探究～	25. 11. 7 (木)
39	鳴門教育大学 附属幼稚園	幼小接続の教育課程開発 —遊誘財がひきだす科学的思考Ⅲ—	25. 11. 16 (土)
40	香川大学教育学部 附属幼稚園坂出園舎	幼児教育の質を高める計画と実践の在り方を考える ～主体性と協同性の視点から～	26. 1. 31 (金)
	香川大学教育学部 附属幼稚園高松園舎	能動性を発揮する保育環境の再考 —いきいきと表現する子ども—	26. 2. 7 (金)
41	愛媛大学教育学部 附属幼稚園	未定	26. 2. 7 (金)
42	高知大学教育学部 附属幼稚園	発達の連続性をふまえて、経験の意味を問う ～よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方～	未定
43	福岡教育大学 附属幼稚園	言葉でつながり合う幼児を育てる ～言葉の育ちを促す媒材の工夫を通して～	25. 11. 15 (金)
44	佐賀大学文化教育学部 附属幼稚園	自律性が育まれる保育	26. 2. 23 (日)
45	長崎大学教育学部 附属幼稚園	小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求 ～ICTなどを活用した観察記録・分析の工夫・改善を中心に～	25. 11. 1 (金)
46	熊本大学教育学部 附属幼稚園	感じる 考える 伝え合う子ども ～思考力の芽生えを培う～	25. 11. 9 (土)
47	大分大学教育福祉科学部 附属幼稚園	子どもの育ちを支える保育環境を考える	26. 1. 25 (土)
48	宮崎大学教育文化学部 附属幼稚園	未定	26. 2.
49	鹿児島大学教育学部 附属幼稚園	協同性を育む保育の在り方	25. 11. 22 (金)



- 発 行 -
全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

- 事 務 局 -
群馬大学教育学部附属幼稚園

〒371-0032 群馬県前橋市若宮町2-5-3 TEL: 027-231-3170 FAX: 027-231-3163
E-mail: kinder@edu.gunma-u.ac.jp